

	保護を通じた熱帯雨林保全の推進プロジェクトを実施		オ・カリマンタン猛禽類プロジェクトを開始
2008年 4月	第5回アジア猛禽類シンポジウムをベトナムで開催(18ヵ国, 102名が参加)	2010年 4月	自然環境保護功労環境大臣賞(国際貢献部門)を受賞
	10月		6月
	ベトナムにおいて猛禽類の生息場所保護を通じた熱帯雨林保全の推進プロジェクトを実施		第6回アジア猛禽類シンポジウムをモンゴルで開催(23ヵ国, 約150名が参加, 猛禽類の最新知見と技術に関する特別ワークショップ Raptor Research and Conservation Techniques を開催)
2009年 11月	マレーシア領とインドネシア領からなるボルネオ島において猛禽類ワークショップを開催し, 両国の共同によるボルネ		

## オオタカ保護活動を振り返る

遠藤孝一(日本オオタカネットワーク)

私が、オオタカ保護にかかわったのは1981年。この年に始まった栃木県北部の那須野ヶ原でのオオタカの密猟防止活動に参加したのが、きっかけである。はからずも、私はその後ずっとオオタカ保護にかかわってきた。以下に、私の所属する日本オオタカネットワークおよびその前身のオオタカ保護ネットワークの活動を中心に、日本鳥学会や鳥学会員との係わりにも触れながら、日本のオオタカ保護活動を振り返る。

那須野ヶ原は、アカマツ林と牧草地がモザイク状に存在する広大な扇状地で、オオタカなどの森林性の猛禽類にとっては絶好の生息地となっていた。ところが、1970年代後半から、複数のオオタカの巣において、雛が密猟されるようになった。

日本野鳥の会栃木県支部は、栃木県や栃木県警に対して、密猟の取締りや捜査を依頼したが、それらの機関は積極的に動こうとはしなかった。そこで1981年、メンバーが交代で車やテントに寝泊りしながら、オオタカ1巣をふ化後間もなくから巣立ちまで約1ヶ月に渡って監視を行い、雛3羽を巣立たせることに成功した(遠藤1989)。

ちょうど同じ頃、東京都と埼玉県の間境に位置する狭山丘陵でも、日本野鳥の会東京支部の有志によって密猟監視活動が始まった(オオタカ密猟対策協議会1984)。

これらの密猟監視活動はマスコミにも大きく取り上げられたことから、猛禽類の密猟問題への関心が高まり、1983年10月、オオタカ、クマタカ、ハヤブサなど6種(亜種)の猛禽類が、飼養や譲渡、輸出入に関して厳しく制限される「特殊鳥類の譲渡等の規制に関する法律」の「特殊鳥類」に指定された。これによって、密猟・違法飼育対策

は一歩前進した。

さらにその後、1992年には「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(以下、「種の保存法」)が制定され、違法な捕獲や飼育に対する罰則が強化された。このような法律の整備、行政や警察による取締りの強化、保護団体による普及啓発活動やパトロールの実施などによって、現在では、1970~80年代と比較すると、猛禽類の密猟はかなり沈静化した。

一方で、1980年代後半になると、バブル経済に後押しされ、オオタカの主要な生息地である里山では、ゴルフ場をはじめとして様々な開発が急増した(遠藤1994)。開発に対するオオタカの保護活動が始まったのが、このころからである。

この活動の原動力になったのは、オオタカ保護ネットワークである(オオタカ保護ネットワークは、1995年に全国的な活動を行う日本オオタカネットワークと那須野ヶ原を中心に地域活動を行うオオタカ保護基金に分離され、現在に至っている)。同ネットワークは、1989年に日本野鳥の会栃木県支部を母体に、全国のオオタカ保護活動の支援者、各地でオオタカの保護活動を行っている保護活動家や研究者によって設立された。1990年には第1回オオタカ保護シンポジウムが、東京・立教大学で開催され、その後同シンポジウムは、関東を中心に各地で13回開催され、オオタカ保護に関わる人々の情報交換や研究発表の場となった。なお、同シンポジウムは、ほぼ毎回日本鳥学会の後援を受けて開催されている。

さて、話しをオオタカの生息環境の保全に戻すと、1980年代の後半の時点では、オオタカの生息環境の保全に関する仕組みや法律は不十分なもの

であった。しかしその後、1992年に「種の保存法」が制定され、その中で「国内希少野生動植物種」(以後、「国内希少種」)の生息地について、土地所有者の保護義務、環境庁長官の土地所有者に対する助言指導、生息地等保護区の指定が明記された。そこで、オオタカ保護ネットワークでは、1992年の8月に栃木県西那須野町で開催された第3回オオタカ保護シンポジウムの中で、オオタカなど「特殊鳥類」を種の保存法の「国内希少種」に指定すべきという決議文を採択し、環境庁に対して要望を行った。その後、「特殊鳥類」は「種の保存法」の「国内希少種」に指定され、生息地保全の法的な裏づけがなされた。

しかし、法律はでき、「国内希少種」に指定されたものの、生息地等保護区が指定されることもなく、また具体的な保全手法も明記されていないことから、猛禽類と開発計画とのトラブルが相次ぎ、社会問題化した(遠藤1994)。そこで環境庁では、1994年に野生生物保護対策検討会のもとに猛禽類保護方策分科会を設置し、開発計画との摩擦の大きいイヌワシ、クマタカ、オオタカの3種について、保全策の検討を行った。分科会のメンバーは、いずれも鳥学会員である由井正敏(座長)、上馬康生、柳沢紀夫、遠藤の4名であった。その成果が1996年に発行された「猛禽類保護の進め方(特にイヌワシ、クマタカ、オオタカについて)」(環境庁自然保護局野生生物課1996)である。その中で、上記3種について、開発行為に際しての保全策が示された。これは法律ではないが、その後の猛禽類の保全はこの指針を基に実施されるようになる。

このような法律の整備や保護指針の策定によって、現在では、開発にかかわるオオタカの生息環境の保全については、一定の配慮が見られるようになった(鈴木2007)。

最後になったが、研究による知見の集積といった学会本来の貢献も見逃すことはできない。特に2000年以降、鳥学会員によるオオタカの研究が盛んになり、生息状況(Kawakami& Higuchi 2003, 内田ら2007)、形態(茂田ら2007)、営巣環境(鈴木1999, 堀江ら2006, 植田ら2006)、幼鳥の行動(植田ら2006)、渡り(Kudo 2008)、行動圏や環境選択(堀江ら2007, 堀江ら2008)、景観レベルの環境選択(Kudo *et al.* 2005, 松江ら2006, 尾崎ら2008)、遺伝的多様性(Asai *et al.* 2008, Takaki *et al.* 2008)、保全(山家ら2003, 尾崎ら2007)など様々な研究が、日本鳥学会誌や Orni-

thological Science 誌も含む国内外の研究誌に発表されるようになった。これらの研究成果が、今後のオオタカ保護に活用されることが期待される。

## 引用文献

- Asai S, Akoshima D, Yamamoto Y, Shigeta Y, Matsue M & Momose H (2008) Current status of the Northern Goshawk *Accipiter gentilis* in Japan based on mitochondrial DNA. *Ornithol. Sci.* **7**: 143–156.
- 遠藤孝一(1989) オオタカ保護の現状と問題点. *Strix* **8**: 233–247.
- 遠藤孝一(1994) 「種の保存法」はオオタカ保護に何をもたらしたか. 関西自然保護機構会報 **16**(2): 131–135.
- 堀江玲子・遠藤孝一・野中純・船津丸弘樹・小金澤正明(2006) 栃木県那須野ヶ原におけるオオタカの営巣環境選択. *日鳥学誌* **55**: 41–47.
- 堀江玲子・遠藤孝一・野中純・尾崎研一(2007) 栃木県におけるオオタカ雄成鳥の行動圏の季節変化. *日鳥学誌* **56**: 22–32.
- 堀江玲子・遠藤孝一・山浦悠一・尾崎研一(2008) 栃木県におけるオオタカ雄成鳥の行動圏内の環境選択. *日鳥学誌* **57**: 108–121.
- 環境庁自然保護局野生生物課(編)(1996) 猛禽類保護の進め方(特にイヌワシ、クマタカ、オオタカについて). 財団法人日本鳥類保護連盟, 東京.
- Kawakami K & Higuchi H (2003) Population trend estimation of three threatened bird species in Japanese rural forest: the Japanese Night Heron *Gorsachius goisagi*, Goshawk *Accipiter gentilis* and Grey-faced Buzzard *Butastur indicus*. *J. Yamashina Inst. Ornithol.* **35**: 19–29.
- Kudo T (2008) Migration route and wintering area of Northern Goshawk *Accipiter gentilis* breeding in Hokkaido, northern Japan. *Ornithol. Sci.* **7**: 99–102.
- Kudo K, Ozaki K, Takao G, Sakai T, Yonekawa H and Ikeda K (2005) Landscape analysis of northern goshawk home range in northern Japan. *J. Wildl. Manage.* **69**(3): 1229–1239.
- 松江正彦・百瀬浩・植田睦之・藤原直夫(2006) オオタカ (*Accipiter gentilis*) の営巣密度に影響する環境要因. *ランドスケープ研究* **69**: 513–518.
- オオタカ密猟対策協議会(1984) 狭山の森から一オオタカ密猟監視報告'83. オオタカ密猟対策協議会, 東京.
- 尾崎研一・遠藤孝一・工藤琢磨・河原孝行(2007) 環境影響評価によるオオタカ保全の限界とそれに代わる個体群保全プラン. *生物科学* **58**: 243–252.
- 尾崎研一・堀江玲子・山浦悠一・遠藤孝一・野中純・中嶋友彦(2008) 生息環境もデルによるオオタカの営巣数の広域予測: 関東地方とその周辺. *保全生態学研究* **13**: 37–45.
- 茂田良光・内田博・百瀬浩(2006) 日本産オオタカの測定値と識別. *山階鳥学誌* **38**: 22–29.
- 鈴木伸(2007) オオタカ営巣地における開発行為と保護事例. *Goshawk* **5**: 36–42.
- 鈴木貴志(1999) 北海道十勝平野におけるオオタカ *Accipiter gentilis* の営巣環境. *日鳥学誌* **48**: 135–144.
- Takaki Y, Kawahara T, Kitamura H, Endo K & Kudo T (2008)

- Genetic diversity and genetic structure of Northern Goshawk (*Accipiter gentilis*) populations in eastern Japan and Central Asia. Conservation genetics DOI:10.1007/s10592-008-9567-4.
- 内田 博・高柳 茂・鈴木 伸・渡辺孝雄・石松康幸・田中功・青山 信・中村博文・納見正明・中嶋英明・桜井正純 (2007) 埼玉県中央部の丘陵地帯でのオオタカ *Accipiter gentilis* の生息状況と営巣特性. 日鳥学誌 **56**: 131-140.
- 植田陸之・百瀬 浩・中村浩志・松江正彦 (2006) 栃木県と長野県の低山帯におけるオオタカ・サシバ・ハチクマ・ノスリの営巣環境の比較. 日鳥学誌 **55**: 48-55.
- 植田陸之・百瀬 浩・山田泰広・田中啓太・松江正彦 (2006) オオタカの幼鳥の分散過程と環境利用. Bird Research **2**: A1-A10.
- 山家英視・阿部功之・大町芳男・小笠原高 (2003) 人工巢によるオオタカ営巣地誘導の試み. 山階鳥学誌 **35**: 1-11.